

キリシタンの墓

小山牧子
え・石阪春生

修羅 2

あらすじ 二年前短期大学を卒業した佳は、母蘭子との生活に息づまりを感じ、米国系海運会社のエイジェントに勤めに出ることにした。ある日、佳は願成寺の墓地の暗がりで会った村重船長と名乗る老人から、偶然自分の父村林裕作の過去を知る。その父が久しぶりに航海を終えて神戸に帰ってきた。が、母蘭子の冷たい態度に佳の心は複雑だった。そんなある日、佳は新聞に蘭子の短歌が載っているのを見つけるが、まさしくそれは裕作の初恋の女性、故由佳子の短歌の空作であった。酒に酔った裕作は蘭子の名をよぶ九官鳥を床にたたきつけてしまう。

酔いに乱れた父裕作が、蘭子のものである九官鳥の首をへし折ったあの雨の夜以後、見せかけだけにせよ存在した館の平隱な日常の時は失われた。

翌朝、濡れた叢の上にひつかかっている鳥の骸を見つけた蘭子の表情には、殺戮者への怒りの色はなく、夫の所業であると知っているのかどうか、そこには安堵の色と、そしてあるかなしか勝ちほこったときの表情があるように佳には感じられた。もし夫の所業であると蘭子が察知したことならば、裕作の激しい行為も、妻を愛しているゆえの嫉妬からでたこととおもんばかり寛容になれるのだろうか。

紫峰の愛に殉じる情など毛頭ない蘭子にとっては、その忘れ形見である不吉な黒い鳥を夫が始末してくれたことは、むしろ感謝してもいいたぐいのことであつたらしいが、裕作にとつては鳥の無惨な死にも平然としている

蘭子は、不可解というよりも無気味な存在であるに違いない。

虚名を得るというむなし情熱につかれ、それ以外のより大切なものの、骨肉や恩師への愛をためらいなく切り捨ててかえりみぬ強い女。

脇坂紫峰が失踪した翌朝、佳が、愛人と噂された仲の老歌人の枯渴したうたごころを手厳しい批判し、その失踪に悲しみや動搖の色を見せぬ蘭子をなじつていった同じ「冷たい女」の言葉が、裕作の脳裏をもよぎつたであろう。

せめて夫のためでなくともよい。長年の師であり、恋人同志と噂されあつた男の不幸に慟哭の声をあげる女らしい情を蘭子が持つていたら、夫である裕作は、傷つきながら、堪えられぬほどの苦痛を堪えしのびながら、一つづつ妻をゆるし、その女の情の糸の端をさぐりあてたぐり寄せ、再び夫と妻の絆につながれることもできるのではないかろうか。

が、紫峰失踪のときと、鳥の骸をひろいあげてビニールの袋に入れ、台所の汚物と一緒に無造作に清掃車の台に放りこんだときの蘭子の表情は、まるで、石、石の壁だったといつてもいい過ぎではない。

この女を人間同志の愛や情緒の世界に引き戻すことは並の血の通った男にできるものではない。

裕作の蘭子を見る目には、深い絶望の色があった。绝望しながら裕作は、かつて佳がことごとに蘭子に反抗したと同じ方法で、しかし、いたつて弱々しくその石の壁を碎こうとする。

「私のことは、もうよろしいのです……」

ある夜、階下の居間から裕作のいつにない高声が響いてきた。

「しかし、佳のことだけは……」

「なんですって！ 佳を悪くしたのは、あなたでしょ」死をよそおつて静まっていた火山が、とき満ちて噴火するように、蘭子の声が古い館の中で炸裂した。無言のまま見えない刃を振りかざしていた父と母の間に言葉の切りあいがはじまつたのだ。佳は、足音をしのばせて階段の途中まで降り、そこにうすくまつて耳をすませた

「佳は、愛情に飢えているのです」

「違います。二十三歳にもなつてまだ自立できない娘なんて、絶望的じやありませんか。あの娘は、いまはやりの言葉でいうならば、脱子供ができるいないのです」

「その責任がこの私にあるというのですか？」

「そう、当然でしょ」

蘭子の言葉を聞いて、怒りで身体を小さく震わせる佳には、その馬鹿丁寧なほどの切口上で応酬しあう二人の様子から、裕作もまたかなり激昂しているであろうことが想像できた。

「どうして？ どうして私が悪いのだ？ 私は年がら年中船に乗っているのですぞ。家はないのですぞ！」

「そうでしょう。佳と接触する時間は短いでしょう。だけど、その短い期間の佳への影響力があまりにも強すぎるので使うな！」

「なんだって？ そんな言い方はよくわからん。それに、接触とはなんだ。そういう動物的な言葉を、私と佳の間で使うな！」

裕作の仕業だろうか、なにか重い物をテーブルに打ちつける音が響き、そのあと奇妙に冷静な蘭子の声で、

「話をそらさないで下さいまし。わたくし達はいま、佳のことを話しておいたのでしょう。はつきり申しあげられることは、あなたが佳になにか不自然な夢をかけていらっしゃるのがいけないのです。そして、佳に接……あら接触といふ言葉お気を召さないようでしたわね。佳にむきあうとき、あなたは必要以上に自分を優しく見せようとなさる。父親などといふものは、もつと自分の子供たちに、父親への失望感を持たせるように仕むけるのです。子供たちは、その情けない親たちを踏みこえ乗りこえ、規たちよりも立派な大人に成長してゆくのです。

それが、あなたはどうでしょ。御親切にも、この現実の世界では決して存在しないような完璧な恋人の役目さえも佳のために演じてみせる。これでは手も足も出ないではありませんか。親はいつまでたっても一人立ちできない子供のままです」

「なに！ また屁理窟か！ そうだろうな、あんたは偉い人なんだから、女流歌人、村林蘭子、蘭子女史か！ 先生、大先生の口達者にはかなわんよ」

自嘲的とも聞こえる裕作の語調に聞き耳をたてる佳は一瞬、強い不安を感じた。——また酔つている——。裕作は、したたかに酔つてゐるらしいのだ。佳は、そんな父を真実可哀そうにおもう。一年の大半を航海で過ごし、家庭管理の責任をすべて蘭子にまかせているためか、裕作はいつも蘭子に対しては弱腰になる。佳は、そんな父のやり切れないであろう胸の内をおもいやつてはいたが、今度、休暇で帰つた父は、すいぶん勝手が違う。感情の抑制がきかず酒に乱れがちなのは、急に老い込んだせいであるのか。

父は、まだグラスを手にしているらしい。裕作の声は

「もうお飲みにならなければよい」

やがて、蘭子の痼性な声が響いた。

「放つておいて下さい」

陰湿な風のようにくぐもりながら、広間やロビーの床を這い、階段の途中でうずくまる佳の耳に達した。

「しかし、奥さん。いや蘭子女史。どうでもよいことですが、あんたは一体、毎夜どこをうろつきまわっているのですかね？」

二人が黙りあうと、遠い下の街の海へりを走る電車の音が、霧をふくんだ濃い闇を切り裂く電気カッターを連想させる鋭さで伝わってくる。

「私の留守の間もこんなふうだったんですか。だつたら佳はさぞ淋しかつたでしよう。それとも私を避ける原因でもおありなのか……」

「原因というほどのものはありません」

佳には、裕作が次第に邪悪な酔いにのめり込んでゆくらしい様子が想像できた。そして蘭子は、そんな裕作のいさかかシニカルな傾向を帯びる追求に対し、奇妙に切羽つまつた生真面目さで答えていたのである。

「あの……わたくし、お酒の臭いが嫌いなのですわ。本当にアルコールの臭いには我慢ならないんです」

「なるほど、それで私をお避けになる。歌よみの先生方が発散させるお酒の臭いは、気になりませんか？」

「知りません。わたくし酒席にはべる趣味がありませんので……」

「ほう。酒席がお嫌いなのに、真夜中の御帰館ですか？」

「お止しなさい。あなたらしくございませんわ。こ

れ以上おっしゃると嫉妬なさつていると解釈いたしますよ」

「それは困る。困るなア、まつたく。違うんだ。そういうないんだ……」

裕作は、すり切れた音盤の上を回転するレコード針のよう呂律が怪しくなり、何度も同じ言葉を繰り返しはじめ、聞いている佳は、再び悲しみで胸がふさがれる。なぜ蘭子は善良な父をこんなに苦しめるのだろうか。

——可哀そうなパパ。鬼婆なんかにかまつていないので早くお休みなさい。ベッドの中の自分一人の世界に逃げ込んでしまった方がいい。早く、早く！——

が、裕作は、なおも酒瓶から手を放さないでいるらしい。

「もうお止しなつたらいいかがです！」

前にもましてヒステリックな蘭子の声が響き渡った。



「嫌いですか？ 飲んだくれの亭主は……」

言葉をとぎらせてたあと、裕作は唐突に、狂暴なほどの語調で、それまでじっと堪え続けていたらしい言葉を蘭子にたたきつけたのである。

「盗人の亭主は、飲んだくれでたくさんだ！」

「なんですって、あなた？ いつわたくしが……」

「歌だ。あなたは由佳子の歌をねすんだ」

裕作の声は、うめくよう悲痛な響きを帯びていた。

一瞬、言葉を失つたらしい蘭子であったが、やがて沈黙した空間を切り裂くかに似た奇妙に冷静な高い笑声をあげながら、

「まあ、相変らずロマンチストなのね、あなたは……」
「ロマンチストだとオ。そんな次元の問題ではない。あんたが恥を知るか知らんかが問題なんだ」

「恥ですって？ どうして恥なのです？ わたくしは、一つの築かれた伝統の上に新しい花を咲かせたのです」

「馬鹿な！」

「ま、聞いて下さい。歌の生命は、それを創造した歌人の命が絶えるのと同時に失われるのでしょうか。わたくし、そうはおもいません。由佳子さんの歌は、彼女の死と同時に埋れてしまつたのです。わたくしは、生きているものの義務として、その歌に再び生命を与え、更に至高のものへとその歌を浄化させてやらなければならないのですわ。それでなければ、本当にごく一部の人たちの努力によつて守られてきた短歌という伝統的な芸術の灯は消えてしまうのですわ。わたくし、いまほど生きていることがすばらしいとおもつたことはありませんの由佳子さんに生ききれなかつた生命に、わたくしのこの熱く燃えさかる生命を継ぎたのですもの」

厚顔にも、蘭子は裕作という芸術家として最も卑劣な自分の行為にさえも、例のこじつけ理論の裏打ちをしようと/or>しているのだ。

「で、では……死んだ由佳子が死に損だというのか！」

ついに裕作は逆上したらしい噴怒の声をあげ、同時に

立ちあがつたのである。が、すぐによろけたらしく、身体を床にたたきつける鈍い響きが佳の耳に伝わってきた。そして、内臓全部をしぼりあげるに似た苦しげな嘔吐とうめき声――。

「パパ！ 大丈夫？」

大声で呼びかけながら階段を駆け降り、居間に飛び込んゆく。

裕作は、両手の指で臍脂色の絨毯の毛をかきむしる仕種で、必死に嘔吐をこらえているらしく、背中が大きく波立つてゐる。その横に突つ立つたまま苦しんでゐる夫を見下ろす蘭子の表情は、見るものを慄然とさせるほど平静で、血の通わぬ彫像に似たある種の美を宿してゐた。

「ママ、早く洗面器を！」

しかし、せきたてる佳の声に、蘭子は動こうともしない。

裕作は吐いた。吐きながら、身体を縄のようによじり身も世もなく悲しげに、裕作はうめいた。

「いいの。いいのよ、パパ。心配することなんかないのよ」佳は、心をこめて裕作の広い背中をさすりあげる。まめまめしく父を看取る佳と、顔を汚物にまみれさせ、したたかにくじけている裕作の醜さ――。蘭子は、そんな父と娘のありようを、顔に嘲笑の影さえ宿して見ていたが、

「いやだわ、わたくし、こんな形而下的なことには堪えられない。ケイ、絨毯のお掃除もお願ひね」

言い残すなり、顔の前によどむ酒と汚物の残臭を払うためとでもいうように、袂の端を扇がわりにばたつかせながら、自室に引きあげてゆこうとする。

「ママ！」

ふりあおいで咎める佳の目に涙がふくれあがつた。が次の瞬間、蘭子の後姿は、居間の重厚な彫り込みのあるドアのむこうに消えていた。

(つづく)

オリジナル L サイズ

草履新発売

創業明治二十一年

履物の山下

古い老舗に新しいセンス

確実正札 完全冷暖房

静かに品選びの出来る店

神戸三宮センター街 TEL(391)0256

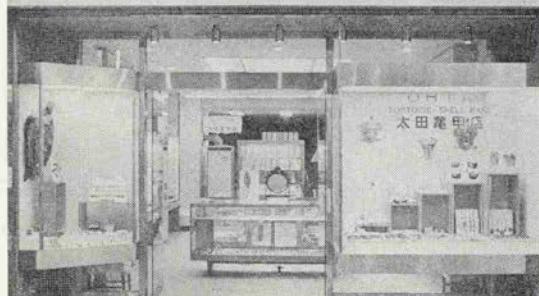


ハイセンスの紳士服で最高のおしゃれを！

三恵洋服店

元町4丁目 TEL(341)7290

太田鼈甲店



べっ甲美術品とアクセサリーの専門店

太田鼈甲店

元町1丁目 TEL(331)6195



Mr. Kent

came to Kobe

流行に左右されない

本来のオシャレ

それがKentです

シックな

スコッチ風の店舗

それがFunakiyaです

Kent shop

フナキヤ

元町3 TEL(321)0356

でんわ
コラボ三宮
サニ

やつぱりうまい
むさしのとんかつ

321 321 331
— — —
○ ○ ○
六 三 四
三 五

瞳に美しさを保つ
スポーツに
美容に
現代の科学が生んだ
コンタクトレンズ

日本コンタクトレンズ協会会員
国際コンタクトレンズ研究所

神戸市芦合区御幸通八丁目九ノ一 (三宮駅前)
神戸国際会館内 TEL(251)8161・(231)2570

高級紳士服專門店

神戸テーラー

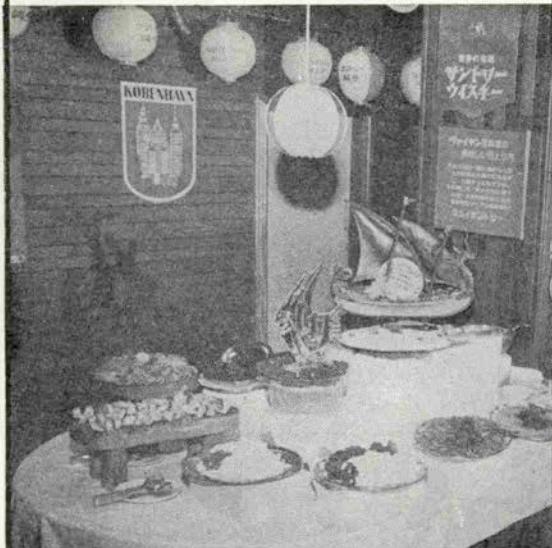


さんちかメンズタウン TEL(391)0388
生田区北長狭通2(阪急西口) TEL(331)2817・3173

A decorative diamond-shaped emblem with a central floral motif and intersecting lines.

営業時間
A.M.11.30～P.M.9.00

パーティ、忘年会に！



〈北欧ヴァイキング料理〉

2000円 〈税込み〉

飲みほううだい（サントリー純生ビール
クラウン・コーラ）+食べほううだい

一品料理、日本酒も準備いたしております
同窓会など各種パーティにご利用ください



なごやかなムード

すばらしい眺望！

スカイサントリー

三宮交通センタービル 9F TEL (391)3705~6

● お酒の殿堂



アサヒビール特約代理店

酒類調味食品問屋

乾 神戸酒類販売株式会社

本店・生田区中山手通1丁目76

TEL (078)321-0201(代表)

支店・西宮・垂水・兵庫

うらない師 向井修二 生月による 11月の運勢

〈11月1日～11月30日〉

★一〇〇%確実当る ★リズムをつけて読むこと★★

曲線ハイウェイ

武田繁太郎
え・横塚繁

長い栗色の髪を垂らした女の後ろ姿を垣間みたのは、幻影だったかと、多木はわが目を疑つた。逢いたいと焦っていた願望が、多木に幻影を抱かせたのかも知れない。

他人の空似とは、よくあることだった。欲目でみれば、長い髪を垂らした後ろ姿が、宇津康子に似た女は、いくらでもいただろう。

しかし、多木は自分の目の錯覚だったとは思いたくなかった。

偶然ということだつてありうる。ここは、宇津康子の住んでいる神戸のクラブだった。この店に彼女があらわれても、へつだん不思議でもなかつた。

だが、ここは、女ひとりだけでくる場所ではなかつた。連れがいなればならない。

多木は、思わずまた、瞳をこらして、ほの暗い店の隅をながめやつた。

だが、女の後ろ姿は、すでになかった。女はちょうど

ふとい円柱のすぐそばで後ろ姿をみせていたのだが、その円柱のかけに吸いこまれるように、女の姿はかき消えていた。多木は、円柱の向う側の客席をみまわした。客席のひとつひとつに、素早い視線を走らせていった。

だが、それらしい姿は、どの客席にもみあたらなかつた。どこへ消えてしまったのか。やはり、多木がみたの

★あらすじ 浜名湖サービスエリアで、多木洋介は若い神戸の女性、宇津康子と知り合い、一夜を過ごした。その夜も、十日か半月おきにデイトの電話をかけてくる康子と多木はMVハードトップを轢つて逢瀬を重ねた。康子の魅力につかれた多木は正体を知るため、神戸出身の友達岡本和彦とその女友達ルミと共に名神を走り、神戸へやって来た。康子の居所を見出せぬ多木は、彼女に面影に似た辰馬英子を紹介された。典型的な神戸っ子である英子に案内され、神戸の街を歩いた後、六甲山をドライブに出かけた。ロマンティックな情景に誘われて、英子を抱きしめた多木の胸に始めて感じりとおしさがついた。その夜、岡本たちとクラブMへ行った多木はほの暗い店の隅に、長い栗色の髪をたらした女の姿を認めてハッとした。

「ああ」
多木は、夢からさめたようにうなずきながら、ようやく席に腰をおろしていた。
「どうなさつたの？」
英子が声をかけた。

「ああ」
多木は、夢からさめたようにうなずきながら、ようやく席に腰をおろしていた。
だが、夢はまだ完全にさめてはいなかつた。あの女の後ろ姿が、多木のみた幻影だったとすれば、彼はあのときから夢をみていたことになる。
いや、幻覚ではない。たしかにみたのだ。あの後ろ姿は、まぎれもなく宇津康子にちがいなかつた。とすれば、いつたい彼女はだれときていたのか。連れはどんな

木の来神を歓迎して、おやじの奢りといこう

そういって、岡本は、ボーキにスコッチを瓶ごと持つてこさせた。多木たちは水割りにしたが、岡本は、ストレートでおりながら、横井にいった。

「おやじ、今夜は例のほうだな？」

横井は笑って答えなかつたが、それが返答になつていた。

「ふん。馬鹿おやじめが！」

岡本は吐き捨てるようになつて、またグラスをひと呑みにあおつた。

「多木。最低に愚劣な話をきかそうか。おやじのやつ、また新しい女を聞いやがつた。須磨のほうにな。かわいそうに。横井がそのお守り役を仰せつかっている。月末になると、うやうやしくお手当てをご持参だ」

横井は表情を殺した笑顔できいていた。

「このちかくに、おやじが畠原にしているBというクラブがある。ちょっとかわいいコがいて、おれ、頂いちまつたんだ。おれの妹とおない年だ。ということは、おやじにとつては、自分の娘とおない年という勘定になる」

「じゃ、つまり、そのコが——」

多木は呆れ顔でいた。だが、ルミは、岡本に寄りそつたまま、けろりとした顔できいていた。その肩に腕をまわしたまま。岡本はいった。

「もちろん、おやじは、おれとそのコのことは知らん。知らぬが仮つてやつさ。だけど、間抜けなのは、どっちか。おれが女を盗られたのか、おやじがお古を頂だいしたのか。どっちにせよ。おれとおやじは、父子で、そのうえ兄弟になつちまつたつてわけさ。しかも、おれのほうが兄貴だ。どうだ。最低に愚劣な話だろう」

「うむ——」

多木は平静さをよそおつて首をふつたが、すつきりし

ない口調になつていた。

「まあ、いいや。大いに呑もうじやないか。今夜は、多



男なのか。

詮策してみても、どうしようもなかつた。苛立たしさが募るだけであった。追いすがるように、円柱の向う側の客席をたしかめてみても、女のいる気配さえも感じられなかつた。岡本がにやにや笑ひながらいつた。

「どうした？ いやに浮かん顔をしてるじやないか」

「いや。べつに」

多木は平静さをよそおつて首をふつたが、すつきりしない口調になつていた。

「まあ、いいや。大いに呑もうじやないか。今夜は、多

ときふと、多木の脳裏をかすめるものがあつた。もしか

したら、宇津康子も、そのコとおなじような種類の女ではなかつたのか——。多木の目も無意識にすわつてた。

だが、岡本は、あいかわらず他人の話でもきかせるよう、投げやりな口調でいった。「おやじもおやじだが、おふくろもおふくろなんだ。おやじの女鄰のわるいのは、むかしから持病みたいなもんで、おふくろも我慢してたんだが、ちかごろ流行のウーマン・リップってやつかね。おふくろも女の意識にめざめたらしく、いい年をして荒れきやがつた。うちののつりしたいやらしい二枚目社員をペットにしてやがる。横井。君にもいちどは白羽の矢がたつたんだろう?」

「まさか」
横井はあわてて首をふつた。岡本は、にやりと笑つていつた。

「両親がそういう調子だから、子弟にはいい教育になるさ。妹は碧い目のフーテンやろうにのほせやがつてると、多木はきいていたが、岡本家はその典型なのかも知れなかつた。豪壮な邸宅をかまえていても、この家庭から、腐ったリングのような匂いがたちのぼつてゐるにちがいない。

岡本が、始終神戸に帰つてきてても、わが家に寄りつかない理由のひとつが、多木には納得できた。

「英子さん、踊ろう」

「最低に愚劣な話」にむかついたように、多木は、何杯目かの水割りをぐつと干すと、英子の手をとつて、フロアにでた。

「さつきは、どうして妙な顔をなさつていたの?」

踊りながら、英子が、ずっと気にしていたようにたずねた。

「ああ。君にそんなふうにみえたとしたら、そりや、あんなハレンチな話をきかされるだろうと、いやな予感がしたからだろう」

多木は、かるくいなすようにいった。

だが、あのときおぼえた苛立ちは、まだ胸中に尾をひいていた。ぶすぶすとくすぶりつづけていた。

バンドがテンポの早い曲を流した。

「ちょうどいい。君、ゴーゴーやれるね?」

「ええ」

「なに、かまうもんか」
「駄目駄目、このまま、おとなしく踊りましょ」

「いや、岡本のやつ、あの調子じゃ、今夜はひと荒れし



そうだ。そしたら、こっちで先手をうつにかぎる。さあ踊ろう

多木は、英子の腕をほどくと、勝手にゴーゴーのテンポで身をくねらせはじめた。

「こっちは、ご常連の岡本貿易の御曹子のお連れさまだ。文句をゆうやつもいまい」

「しようのないひとね」
英子、駄々っ子の相手をさせられるように、ひかえめにゴーゴーを踊りだした。

「よオ、やつてるな。いいぞ。おれたちも負けずにやろう」

いつのまにか、岡本もルミを連れて、多木たちのまえにあらわれ、ならんとゴーゴーを踊りだした。

岡本は、生のスコッチをがぶ呑みしていく、もうかなり酔っていた。多木にも水割りが十分にまわっていた。二人の醉眼には、もう店内の客など写ってはいなかつた。

「ハイ！」「ハイ！」

二人は、それぞれのパートナーを相手に、全身を烈しくねらせていった。

だが多木の胸中にくすぶついている苛立ちは、いつまでもおさまらなかつた。彼は無性に腹だたくなつてしま

た。うつ積しているものを、なにかに思いざま投げつけたりくなつた。多木は、ゴーゴーのステップのまま、英子をリードして、岡本たちのそばまできていた。踊りながら、多木は、あたりをうかがつた。だが、やはり女の後ろ姿は幻であった。ふいに、まだみない岡本の父親の女の顔と、宇津康子の顔とが重なつた。狂暴な感情が喉のとをこみあげてきた。

「英子さん。これから、みんなをまいてやろうじゃないか」

「みんなをまく？」

「うむ。まくんだ」

多木は強引に英子の腕をとると、うす暗い店の隅をつたつて、入口のほうへ歩んでいった。

「もう引揚げるの？」

「いや、どこかへドライブしよう。どこでもいい。そうだ。こんどは海のほうへいこう」

多木は英子の肩を抱くようにして、Mをみると、ちょうどどちかよつてきたタクシーに、さつと手をあげた。

（つづく）

＜神戸の催物ご案内＞

（音楽）

★71神戸市民劇場

パリ「木の十字架合唱団」

12月5日（日）PM6:30 神戸国際会館
入場料 A￥1500 B￥1200 C￥900 D￥600

★「第九交響曲の夕」 大阪フィルハーモニー交響楽団

12月14日（火）PM7:30 神戸国際会館

旁聴 会費 1,100円

指揮 外山雄三 独唱 S中沢桂 A成田絵智子 T丹羽勝海 B栗林義信

★「第九の夕」 京都市交響楽団 神戸国際会館

12月18日（土）PM6:30 19日（日）PM2:00
入場料 A￥1300 B￥1000 C￥700

指揮 渡辺曉雄 独唱 平田恭子 田原祥一郎 石光佐千子 木村俊光

★クールファイブ

12月20日（月）PM2:00 PM7:00 神戸国際会館

民音 会費 ￥950

★トア・エ・モア「クリスマスを歌う！」

12月22日（水）PM6:30 神戸国際会館

旁聴 会費 ￥1000

協演 シローとブレッド&バター トア・エ・モアファミリー



★「第九の夕」 大阪フィルハーモニー交響楽団

12月24日（金）PM7:00 神戸国際会館
民音 会費 ￥950

★第26回ボードジュビリー

12月25日（土）PM6:00 神戸国際会館
入場料 ￥350

★ダークダックス「71さよならコンサート」

12月27日（月）PM7:30 神戸国際会館
入場料 S￥1800 A￥1500 B1000 全館指定席
演奏 白井克治とニュー・ソニック・ジャズ・オーケストラ

（演劇）

★俳優座公演「ブンティラの旦那と下僕マッティ」

12月1日～3日 PM6:15 神戸国際会館

旁聴 会費 ￥600

プレイヒト作・千田是也演出

出演／三島雅夫、中谷一郎、袋正、中村たつ、石橋智子他（映画・浪曲）

★「お活動大写真」 傑かしの無声映画大会

12月7日（火）PM2:00:00 神戸国際会館
入場料 指定席￥1000 自由席￥700 前売￥800、￥500
尾上松之助「忠臣蔵」 井上正夫「己ヶ罪作兵衛」
片岡千恵蔵「ごろん棒時代」

★浪曲大会と浪曲忠臣蔵お芝居

12月9日（木）AM12:00 PM5:00 神戸国際会館
入場料 特別席￥2000 1等席￥1500 2等席￥1000

